破れるはずの厚い壁
つきあげてくる力
期手闘争

朝もやをついて出勤する人びとにまじって、Aさんは三川鉱までやってきて、ポケットから二枚のビラをとり出した。

見出しは、一つは「期手四十万円満額獲得」、もう一つは「坑外三十年で一千万円」。そのビラを靴で踏みつけるように棄てて出勤したのだ、という。

「期末手当闘争の妥結を聞いて、どうにも腹にすえかねてのことだったろうが、停年間近のあの柔和なAさんのその行動に驚かされると同時に、このことはまたスタグフレーション下、人びとはビビッた気持をつきあげて、大衆路線をつらぬき、本当にみんなを立ち上がらせることが出来るなら、情勢の厚い壁をつき破り、要求を獲得できることを教えてくれた。

期末手当闘争の感想は、と聞いても、仲間の口は重たいのである。それでも語られている声は。

×

——期末手当の四十万円要求は、これで三度目じゃないか。日産二万トンが、トントンに出てるぜ。（三池労組員）炭価も、二千五百円から三千円にひきあげられたというのによう。（右同）

——たたかい方も何かというと二四ストだ、四八ストだ。それなのに、すぐスト中止。時間外拒否、時限ストといろいろ方法もある。期手では、ストはうたんとか。（右同）

——そして、支払い期日も配分方法もわからんままの妥結やないか。（右同）

——でも、炭界はえらく早ようまでは、頑張らっしゃると思うとったつに。（新労組員?）

——新労組がストばするぞ、と言言したら三十五万円。かまえたら四十万円。実際にストにはいったら、四十二万円の満額獲得だったろうな。（右同）

——おれんところの組合員が、他人ごとのように闘争を考えているところが、一番の弱点ですな。（右同）

——結婚したばかり。妻も看護婦をやめてしまい、子どももできる。期末手当はそっくりそのままお産費用。（三池労組員）

——エッ、百万円。じょうだんのごつ。そげん思うとっとな。ショックやなア。たったの一・四倍ですよ。朝は早や出。帰りは夜の八時（三池労組員は午後四時昇坑）ですばい。くたくた。酒飲んでコタツにどたり。このくり返しですよ。（主席係員）

——正月田川にサト帰り。手みやげはいるですけん、三十二万円の期手は一発で終ります。年に一度のサト帰りも、つい考えこんでしまう。（新労組員）

——C給とB給の差も、あんまりないですよ。期末も差はせいぜい二〜三万円くらいじゃなかですか。これまで、C給作業（請負作業）で無理して働いてきたことを反省しているですよ。（右同）

×

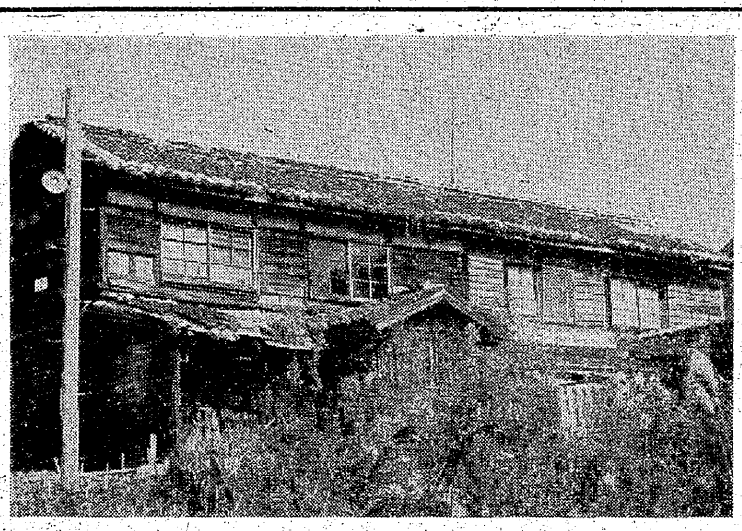
私が今次の期手闘争を通じて痛切に感じたことは、「たたかい抜いた」「たたかいとった」という実感がないことから、これからのたたかいで展望を切り開く統一闘争の上からしても、エネルギーが生まれてこないのじゃないか、ということが第一。

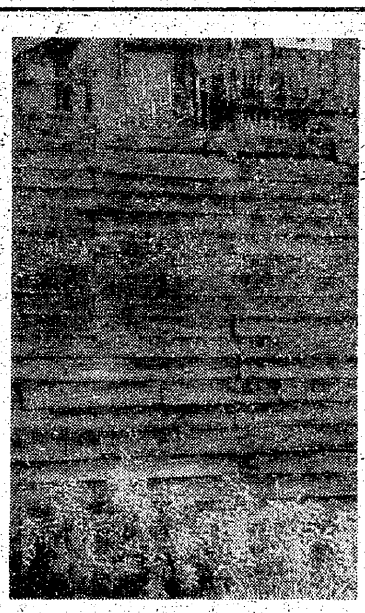
第二は、自治労の地方財政危機を打ち破るたたかい、国労を中心としたスト権奪還、教組の主任制導入反対闘争など、たたかいの大きな流れの中で連帯するたたかいの組上げと、住民と密着したたたかいの掘り起こしの重要さ。

第三に、高島・幌内両炭鉱の重大災害は、三池炭鉱の危険信号でもあることの認識が必要であること。

とまれ、じっとしておれない巨大な力が、自分の内面からつきあげてくることを感じないではいられない。

（この項三川指導部月野記）





荒廃がひどい長屋づくりの社宅。「修理しようにも、追つつかない」という主婦もいたが…。

どんな社宅も心のふるさと
住む人の心情を思え
組合居住権の獲得へ　会社、社宅集約を提案

かねて会社が提案してきていた、電気料金の値上げと社宅の集約化の問題について検討していた三池労組は、すでに組合が要求していた「百キロワットまで無料とせよ」（電気料金）ということと、「計画的に平屋建てのものを新築せよ」（社宅）ということを無視したものとなっている点から、「反対してたたかう」方針を固めた。

電気料金値上げの問題については、本紙六面の宮崎勝さんの手記を参考にしていただくとして、社宅の問題について組合はこのたたかいを通じ、全社宅を対象に計画的に平屋建ての家屋を新築させ、広大な社有地を安価に払い下げさせ、その実現を前提に「居住権の自由の保障」を確保することをたたかいの目標にしている。

もともと会社は提案に際し、次の意志を明らかにしている。

「いままで、老朽家屋の撤去を実施してきたのであるが、こんど第二次集約化の必要上、集約化対象に投入してきている近代化資金を凍結し、一般営繕のみとし、現在の六千七百七十三戸を、五千七百七十七戸に逐次集約、社宅管理の整備をはかってゆく」

つまり、現在はいっている労働者をじわりじわり追いつめることによって、うまく社宅から追い払おうということで、まさに巧妙な手口の合理化だ。

もっとも、会社が集約化対象にあげている社宅について実状を見ると、なるほど明治—大正時代に建てられたお粗末な長屋もあり、従って荒廃はひどい。

これは勝立社宅のうち、馬渡社宅に住む新労組員家庭の一主婦の述懐だが、いわく——「もう、どんな修理も追っつきませんもん」

事実長屋づくりの屋根は波うち、壁は崩れ落ちかかり、現代の人間の住まいにはほど遠い。改築は当然だ。

だからといって、次のような切実な声があることは重大だ。

「たとえその住まいはボロ社宅でも、簡単には出てゆけんばん。この、クルマの車庫もブロックを使った永久建築。この通り、このところ買いかえたばかりの新車をいれとる」（大砂社宅の新労組員家庭の一老人）

「私は、働く合い間のこの盆栽づくり、庭づくりの趣味を生き甲斐にしとる。この植木、この温室を、会社が思うとるごつ、サッとどこにうつすですか。動きたくなかですよ」（通松社宅の一新労組員）

「会社は簡単に思うとるが、これでもこの家に、明治—大正—昭和と、三代にわたって住み馴れてきた家。じいさんから俺、それから今宮浦鉱で働いている息子じゃが、いわばここそが故郷で、今どこさんゆく気持もなかよ」（大砂社宅の新労組員家庭の一老人）

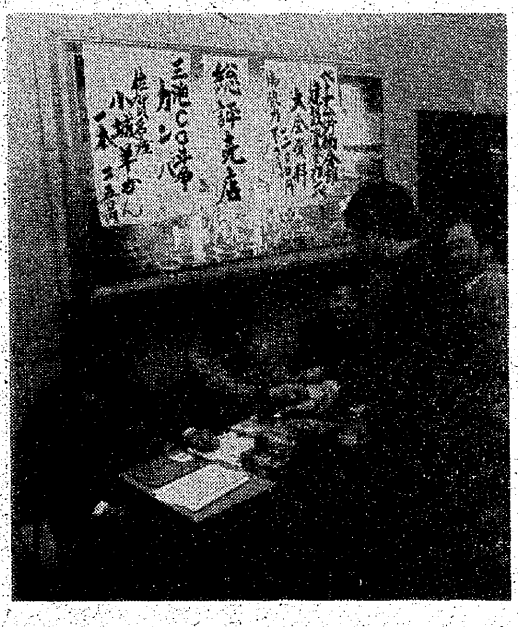
会社は、何はさておき居住権を保障し、そこに住んできた人びとの心情を考え、人間的な見地に立ったうえで、計画を初めから練り直すべきだ。

おわび

▼…本紙前号の六面に、四山指導部の羽江英雄さんの手記「COオルグ報告」を紹介しましたところ、羽江さんのお名前を過まって「芳雄」と伝えてしまい、大変ご迷惑をおかけしました。

その旨訂正して、心からおわびいたします。

——編集部



三里連協がへラぶな釣大会

三里校区連絡協議会（片山末吉議長）の新聞〝連協だより〟（三号）によれば、同連協は釣クラブとともに、十月二十六日へラぶな釣り大会をもよおした。

当日は午後一時、西鉄電車の蒲池駅前で検量。その結果、大物賞で一位が藤末成助さん、二位に上田徳助さん。また重量賞は宮崎利弥さん（組合員子ども）に。ブービー賞江上俊宏さん。そして、全員に参加賞。

同紙は、「スモッグの街大牟田を離れて、秋空のもと新鮮な空気を胸一パイ吸いながら、釣り糸を垂らす気分は何ともいえないと、みんな大喜びでした」と伝えている。なかには、釣りは初めてという人がいて、ベテランのコーチを受けながら大奮闘したとか。

宮浦関係でも……

宮浦指導部坑外分会新聞〝つどい〟（三五号）も、鹿児島・指宿をまわった「勝立組一同」と、呼子—波止岬—唐津を旅した職場なかまの手記を紹介している。

火花

総評臨時大会で
COヨーカン販売
総評本部勤務の有志が

十一月十七日に総評第51回臨時大会が開かれ、今総評本部で働いている三池出身有志がかけつけてくる代議員に呼びかけ、「三池のCO闘争支援のためだ」としてCOヨーカンの販売活動。

総評法対部に勤務している吉田賢治さん（千二百名のなかの一人で、かっては宮浦鉱の仕繰工だった）の便りで、初めてわかった。

もっとも売れゆきは五十六本だったということだが、「代議員は異口同音に、うちにもきている。ヨーカンばかりでなく、何かほかのものはどうか」、などの声が聞かれたと、吉田さんは手紙にかいている。それでも、「単産や地評の幹部である大会代議員に、さらにPRするために売店を出したもので、一応PRは成功したものと思います」とのこと。

なお便りによれば、関東不知火会のメンバーが中心になり、積極的にヨーカン販売を行うことにもなっているよし。

皆さんのご厚意に、心から感謝の意を表したい。

×

吉田さんへの連絡は、「東京都港区芝公園二丁目八番三号、総評法対部」です。

総評臨時大会で、COヨーカン販売。後ろ向きに立つ人が、吉田さん。